

**特集****病院図書室に求められる新たな機能****これからの  
病院図書室ネットワークの在り方**

前田元也

1. はじめに
2. ネットワークの現状と役割
3. ネットワークと図書館の3要素
4. これからのネットワーク活動の在り方
5. おわりに

**1. はじめに**

病院図書室を取り巻く、この間の急激なまでの環境の変化、とりわけ情報技術の進歩は、必然的に利用者の情報に対する要求を向上させ、より高度化かつ多様化させてきた。もちろん、このことは歓迎すべきことではあるが、一方でこれらの要求を満たしてくれる部署、すなわち病院図書室が本来の力を十分に発揮することができず、利用者があふれる情報を前にして消化不良をおこしていることもまた事実ではないだろうか。これは、個々の病院図書室の発展に支障をきたす、さまざまなマイナス要因によって、状況に柔軟に対応することができないひとつの現れといえる。私たち図書館員は、これらのさまざまなマイナス要因を確実に取り除き、高まる利用者の要求に答えていかなければならない。

これまで私たちは、利用者の要求に積極的に応えるために、自らの手でネットワークを築き病院図書室を守り発展させてきた。そこで、現在のネットワーク活動を振り返り、こ

まえだ もとや：西淀病院図書室

れからのネットワークの在り方について検討してみたいと思う。

**2. ネットワークの現状と役割**

病院図書室の果たすべき役割は、それぞれの設置主体別や規模などにより若干の違いはあるものの、共通して言えることは「診療（診断、治療）・研究・教育などに携わる各専門スタッフが、必要とするありとあらゆる情報を収集し、迅速にしかも正確に提供する」ことにある。

そして、これらの役割を果たしていく上でネットワークが必要とされ、これまで着実に発展を遂げてきている。現在、私の知る範囲では、病院図書室が参加するネットワークは14団体が存在する〔表1〕。その他にも、日赤<sup>(1)</sup>、徳洲会などを中心に、設置主体別のネットワークも広がりつつあるようだ。

たしかに、いかなる病院図書室であろうと、利用者の情報要求に積極的に応えようとするならば、一病院図書室の蔵書や予算では限界があり、必然的にお互いの蔵書を利用しあうという資料の共有化、即ちネットワークの形成が図られるのは当然のことである。また、病院図書室の担当者は専任であれ、兼任であれ、そのほとんどが一人担当者であるため、常に疑問や不安を抱えて業務を行っている。ネットワークはまた担当者にとっても大切な情報源の役割を担っているといっても過言ではない。一病院だけの努力では決して行うことのできないサービスをネットワークという

大きなバックアップによって行うことができる、利用者に対してより積極的なサービスを展開することができるのである。ネットワークは病院図書室のレベルを維持するのに必要であるのみならず、結果的にそれを発展させることにつながっていると見える。

具体的にこれらのネットワークをいくつかの種類に分けて考えてみたい。<sup>(2)</sup>

【表1】

- ・病院図書室研究会
- ・近畿病院図書室協議会
- ・北海道病院ライブラリー研究会
- ・福島県医療機関図書室協議会
- ・新潟県病院図書室研究会
- ・栃木県医療情報ネットワーク協議会
- ・埼玉県内医療関係図書館図書室実務者会議
- ・横浜市立大学医療情報センターと医療関係図書室連絡会
- ・静岡県医療機関図書室連絡会
- ・東海地区医学図書館協議会
- ・三重県病院図書室研究会
- ・島根県医療関係機関図書館(室)懇談会
- ・四国・中国地区医療機関図書室ネットワーク
- ・小児病院図書室連絡会

(1) 機関加盟と個人加盟のネットワーク

ネットワークは機関として加盟するネットワークと個人として加盟するネットワークのふたつに分けてとらえることができる。それぞれに長所があり、どちらを選択するかは個々のネットワークの特色によって異なってくるだろう。

機関加盟のネットワークの長所としてまず考えられることは、各病院の財産である資料を公開し共有するという観点である。利用しようということは、図書館員の意志ではなく、加盟機関の合意といくつかの取り決めや手続

が必要となってくる。そのことは、加盟機関における病院内の図書室の位置づけを明確にさせ、病院管理者の図書室に対する認識の向上につなげることも可能にする。具体的には、ネットワークに関係する文献相互貸借の実務などが図書室業務として確立され、業務として、ネットワークの取り組み（研修会、勉強会、諸会議など）に参加することが保障されることにつながる。その他、担当者が仮に交替してもネットワークの一員として継続することができる。

一方、個人加盟のネットワークの長所は、加盟にあたって機関の合意や手続きが不要であることから、病院の考え方とは別に入室することができること、即ちネットワークの設立や参加が比較的容易であることである。更に、個人加盟であることから、図書館員に光をあてた取り組みを、自由な立場で、図書室の大小に左右されることなく、展開することができる可能性をもっているといえる。

(2) 設置主体別のネットワーク

病院図書室を取り巻く環境を改善するためには、病院管理者の図書室に対する理解が必要なことは言うまでもないことである。最近、設置主体別の病院図書室ネットワークがいくつか発足したが、これらのネットワークが管理者に対してさまざまな働きかけをしていくことはこれからの病院図書室の発展に大きな意義を持つものである。図書館員側にとっても設置主体別に独自の共通した問題点や課題、特殊性などを共有し、解決する場として有益だと考える。

(3) 全国ネットワークと地域ネットワーク

病院図書室のネットワークは、また、全国規模のネットワークと地域を主体としたネットワークのふたつに分けて考えることができる。

地域ネットワークの長所は、第一に運営面での簡便さが挙げられる。幹事会や必要な諸会議、また、研修会や勉強会などの企画運営にたいへん便利であり、参加が容易であるた

め多くの参加者を得ることができる。一方、全国規模のネットワークの長所は、より多くの資料を共有できることにあるだろう。事実、文献の流通面では地域を限定する必要は全くない。加えて、種々の取り組みにおいても、大規模に取り組むことが可能となる。

#### (4) 病院図書室主体のネットワークと大学図書館主体のネットワーク

更に、病院図書室主体と大学図書館主体のふたつのネットワークに分けて考えることもできるだろう。

病院図書室主体のネットワークは、病院図書室に即した活動を自分たちのやり方で試みていくことができるという利点がある。確かに小規模な図書室が独立して活動していくには、経済的、技術的、人的にも一定の制約があり事実たいへんなことである。しかし、病院図書室の目的を達成するためには、自分たちで考えられることを自由に試みることができることは、将来の方向性を考えていく上でも、大切な活動であると考えられる。

また、大学主体のネットワークは、やはり、病院図書室とは違って、大学図書館の規模や技術、人の面からも比較にならないほど充実しているため、病院図書室の発展にとっていい意味で援助、アドバイスが受けやすいネットワークといえる。ただし、大学図書館との関係をいかにうまく保っていくかが大きな課題であろう。今年度より、日本医学図書館協会（JMLA）が、病院図書室の入会に門戸を広げた。病院図書室の発展にとってプラスになることを期待したい。

以上、4つの側面から病院図書室のネットワークを考えてみた。病院図書室を取り巻く環境や現状などから考えると、現在のところ、どの種類のネットワークもそれぞれの目的に添った役割を十分果たしているようである。このことは、現実に活発な活動が行われていることから明らかである。

### 3. ネットワークと図書館の3要素

利用者の求める資料や情報を提供する図書館は、「資料」「図書館員」「施設」の3つに分けて考えることができる。この3者を『図書館の3要素』といい、どれひとつ欠けても図書館として存在することはできない。この3者の図書館運営に対する貢献度は、資料が20パーセント、図書館員が75パーセント、施設が5パーセントともいわれている。<sup>(3)</sup> 図書館員の果たす役割が、他の要素から比べても、かなり高いことが特徴である。

また、病院図書室の目的を達成するためには、次の6つの点が重要であると指摘されている。<sup>(4)</sup>

- ①図書室は独立した組織で独自の予算を持つこと、病院内の他の部局との関連については、病院組織機構に明示されていること。
- ②十分にトレーニングを積んだ司書が配置されていること。
- ③利用者のニーズに応じて、最新の信頼できる蔵書構成でしかも利用しやすく整理（各目録の整備）されていること。
- ④求められた情報を迅速にしかも確実に提供するための、各種のサービス（クイックレファレンス、文献調査、相互利用による文献入手、カレントアウェアネス、及び利用者教育）が行われていること。
- ⑤図書室の位置は、全利用者が利用しやすいように、病院の中央部分に設備され、スペース（書架、閲覧、検索機、貸出カウンター、事務室等）も充分にあり、機能的で図書室としてのみ利用されること。
- ⑥病院図書室は限られた資料の有効利用を図るとともに、他の図書室との蔵書の有効利用のためのシステムを確立すること。そのために所在情報源である総合目録やユニオン・リストを収集すること。計画的な分担収集や重複雑誌交換制度の確立に努力する必要がある。

これらの指摘を、図書館の3要素に、照らし合わせて考察してみると、次のようになる。

【表2】

資 料	③ ⑥
図書館員	② ③ ④ ⑥
施 設	① ⑤

この結果からも明らかなように、私たち図書館員が、目的を達成していく上で、重要な役割を担っていることがよくわかる。

また、これら6つの指摘は、各図書室が独自の努力をしていくことも大切であるが、同時にネットワーク全体としても、取り上げて具体化していく必要がある。

以上のことから、私は“病院図書室に求められる新たな機能”を探り、実践し、ネットワークを推進していく上で、特に重視して取り組まなければならない課題は、病院図書室の担当者である図書館員の専門職としての育成、更にそれを阻む要因を取り除いていくことにあると考える。事実、これまでの病院図書室を大きく発展させてきた原動力は、ネットワークを発展させていく中で、図書館員がその役割を確実に果たしてきたということが大きな要因であると思う。今後の発展においてもかわりはないだろう。病院図書室の場合、図書館員の力量が、その病院図書室の機能を大きく左右することからも重要である。

4. これからのネットワーク活動の在り方

これからも、病院図書室のネットワークではさまざまな取り組みが試行されるであろうが、基本的に貫かなければならない視点をいくつか挙げてみたい。

ひとつは「病院図書室機能の充実を基本にした活動の追求」である。多くの病院図書室

では基本的な整備すらされていない状況にあり図書館として機能を果たすことが難しい。ネットワークではこの現状の打開に向けてさまざまな活動が試みられるべきで、これを抜きにして病院図書室の発展は有り得ないであろう。

ふたつめは、「相互補完型のネットワークの追求」である。病院図書室の場合、どんなに大きな図書室でも、自館だけの努力では、利用者に十分なサービスを行うことはできない。お互いの資料を公開、共有し、ひとつの大きな図書館を作るという試みである。これは単に資料の共有にとどまるものではない。近畿病図協の場合は、必要とされるサービスセンター（総合目録調査センター、BLLDセンターなど）を設置して、加盟している病院図書室をバックアップする試みが行われており、活発に利用されている。

三つめに、「コンピューターネットワークへの積極的試みの追求」が挙げられる。コンピューター技術の発達はあらゆる図書館業務に大きな変化をもたらしてきた。パソコンを通して、必要なデータを引き出せる時代になっている。まさに、情報の共有化である。すでに、コンピューターの利用ぬきにネットワークは語ることはできない。

最後に、「それぞれのネットワークの特色を活かした活動と病院図書室すべてを視野にいった活動の追求」であろう。今後も、それぞれのネットワークがおおいにその特色や長所を発揮して発展させていくことが大切である。自らの手で模索しながら問題点を整理して、新たな方針を立案していく。このことが病院図書室全体のレベルを引き上げる原動力になるのではないかと思う。

また、ありとあらゆるネットワークを全国に張り巡らせて、すべての病院図書室が何らかのネットワークに参加できる状況を意識的に追求していくことが大切であろう。病院図書室全体のレベルの引き上げにつながる課題である。

## 5. おわりに

急激な環境の変化は、病院図書室にさまざまな変化をもたらしている。しかし、私たちはこれまでに、ネットワークから得たしっかりとした蓄積の上に立っているという確信をもち、今まさしく目的を同じにした仲間と共に、一步前進した新たなネットワーク構築のスタート地点に立っているといえる。

新たなネットワーク構築に必要な課題は、今後、より高まるであろう利用者の情報要求にネットワークとして組織的に応えていくことである。その実現にはさまざまな問題があることは事実だが、解決のカギを握っているのは図書館員であり、専門職としての成長、育成にあるのではないかと思う。

このことは、医学の進歩に貢献し、社会発展の一助となる。したがって、私たちの努力は、より多くの利用者に受け入れられ、今後、もより発展していくものと確信している。

## 参考文献

1. 木下久美子：“日赤ライブラリアンの会”が発足！. 病院図書室 14(3):113, 1994
2. 〔特集〕病院図書館の地域ネットワーク. 医学図書館 37(3):114-181, 1990
3. 森崎震二：今日の図書館－憲法5原則のひとつの展開. 文化評論 (364) :54-82, 1991
4. 奈良岡功：日本医学図書館協会と医療情報ネットワークの形成－地域ネットから全国ネットへ. 医学図書館 37(3):175-181, 1990